

タイモンと天上の音楽

高根 広大

1. はじめに

『アテネのタイモン』において、タイモンはアテネの人々に過剰な贈り物をする事で破産し、彼を見捨て離れていく人々の忘恩を呪って人間嫌いとなる。タイモンに莫大な財産があるうちは、人々はその豊かさや恵み深さを崇め、彼自身もまた贈り物をする事で惜しみない慈愛の心を示そうとする。ところが、彼の財産が底をつく、アテネの人々はタイモンから離れていき、金を貸してやろうともしない。ひたすら富を分け与えることで成り立っていた人間関係は、富が尽きることで終止符を打たれるのである。富を分け与えることで友情が育まれていると期待するタイモンには、直視しがたい非情な現実がつきつけられる。

それでは、経済的な関係が脆くも崩れ去る『アテネのタイモン』において、欠如している理想の人間関係とはどのようなものであろうか。本論ではこれをキケローやプルタルコス以来の伝統である、助言し合う中で形成される友情であると提案する。実際、タイモンはアペマンタスやフレーヴィアスに何度も散財をやめるよう忠告されているにもかかわらず、それを聞き入れようとしない。それどころか、自分の耳を喜ばせる追従に耳を貸し、いっそう贈り物をしようとするのである。本論ではこうしたタイモンの周囲の人々の言葉と、それに対するタイモンの態度、さらにはタイモン自身の言葉を考察することで、『アテネのタイモン』において問われている人間関係とそれを支える言葉について明らかにしていく。

2. タイモンへの忠告と追従

タイモンの出費が無分別であることには議論の余地がない。タイモン自身、人づき合いのため、あるいは人助けのために良かれと思って金を使っているにしても、破産していいとまで思っていたわけではない。タイモンは債務の取り立てに來た者たちを前にして初めて財政の困窮に気づくのだが、このとき彼は執事のフレーヴィアスに対し、なぜ知らせてくれなかったのかと責めている。タイモンに言わせれば、もし財政状態について知らされていれば、「あるだけの財産に応じた金の使い方をしたはずだ」(2.2.126-27)というのである⁽¹⁾。

だが、フレーヴィアスにも言い分はある。彼は「聞いてくださらなかったのです。何度も機会を見つけてお話したのに」(127-28)と、タイモンが彼の助言を悉く無視してきたことを指摘する。その代わりにタイモンが聞き入れていたのは、彼に対する褒め言葉である。フレーヴィアスはタイモンが人々を贅沢にもてなし贈り物をすることで称賛を受けてきたことを、「褒め言葉を買う (buy this praise)」(169)行為であると表現し痛烈に批判する。

同じことは哲学者のアペマンタスにも指摘されている。アペマンタスは第一幕の宴の後にタイモンと一対一で向かいあったとき、「正直なばかものは財産をはたいて追従を買う」(1.2.243)と忠告する。しかし、タイモンを「正直なばかも」の一人であると「ののしる (rail)」(247)アペマンタスの忠告は、その苛烈な表現ゆえにタイモンに拒絶されてしまう。

TIMON Nay, an you begin to rail on society once, I am
 sworn not to give regard to you.
 Farewell, and come with better music.

APEMANTUS

 Thou wilt not hear me now, thou shalt not then.
 I'll lock thy heaven from thee.
 O, that men's ears should be
 To counsel deaf, but not to flattery. (1.2.252-57)

タイモンは耳に逆らうような忠告よりも、「もっと良い音楽 (better music)」を持ってこいと言う。アペマンタスが「忠告 (counsel)」と「追従 (flattery)」を対置させて嘆いていることから、タイモンが求めている「もっと良い音楽」とは追従のことであるとわかる。しかし、タイモンは自分が求めているものは真の友情であると思い込んでいて、実際は上辺だけの追従であるとは気づいていない。アペマンタスの忠告はタイモンにそのことを気づかせようというものである。その意味で、アペマンタスは自分の忠告こそ良い音楽であり、「天上 (heaven)」に誘うものと見なしている。それに「鍵をかける (lock)」という言葉どおり、彼の忠告はこの場面の後、タイモンがアテネを離れるまで描かれない。

こうした忠告と追従、あるいは真の友人と追従者との対比は、キケローやプルタルコス以来の伝統である。彼らの友情論は対等な人間が助言し合う中で形成する人間関係を理想としたが、ルネサンス期の人文主義者たちはこれを主従関係に応用し、宮廷人が助言を通して主君に美德を教え込むことを理想とした (Shannon 46-53)。このとき、主君から助言を遠ざけるものとして危険視されたのが、追従者の存在である。『アテネのタイモン』はジェームズ一世の治世と比較して論じられることが多いが、ジェームズの師であるジョー

ジ・ブキャナンは王が臣民の手本となり美德を示しつつ、時として臣民に教えを請う必要があると論じている (Buchanan 52-55)。一方、議会との対立が知られているジェームズ一世は手本としての王の役割を強調し、基本的に王は法に従うべきであるとしていながらも、王の意思は法に縛られないとしている (James I 69-70, 131)。タイモンのような有力者と周囲の人間が助言し合う時にどのような問題が起きるかということは、当時の読者や観客の関心の的となったはずである⁽²⁾。

キケローは「忠告を与えかつ与えられること、一方は率直に、しかし苛烈にならぬよう行い、他方は嫌がらず我慢して受けること、これが真の友情の本分であるように、友情には阿諛、おべっか、追従以上の害毒はない」(キケロー 74)と主張する。キケローは友情の本質を助言し合う関係に見出しているが、『アテネのタイモン』において、タイモンが周囲の人間に与えるのは助言ではなく富であり、受け取るのは追従である。言い換えれば、助言が介在する理想的な人間関係は、すでに退廃したかたちで描かれているのである。『アテネのタイモン』が描き出しているのは、これまで批評家たちが多く論じてきたような、経済によって支えられる社会の潜在的な不安だけではない。たとえば、ケン・ジャクソンは贈与によって形成されるタイモンと周囲の人間との関係を論じながら、実は贈与という行為が経済的な交換にすぎないにもかかわらず、タイモンが贈与行為を神聖視することが、彼らの人間関係を歪ませていることを示唆している。(Jackson 40)。しかしながら、タイモンと周囲の人間との関係は、経済的なつながりにおける問題以上に、経済的なつながりによって形成されていること自体が問題なのであり、追従に妨げられ助言し合う関係が形成されないことが問題なのである⁽³⁾。

一方、追従者たちや彼らを受け入れてしまうタイモンだけでなく、忠告をするフレーヴィアスやアペマンタスにも問題はあつた。キケローは「率直に、しかし苛烈にならぬよう」忠告すべきであると主張しているが、アペマンタスは前述のように、タイモンを「正直なばかもの」と罵り、結果としてタイモンに耳を傾けさせることができないでいる。一方、執事のフレーヴィアスはアペマンタスとは異なり厳密にタイモンと主従関係にあるため、タイモンの気分をうかがい慎重に判断したうえで忠告しようとするが、かえって「率直に」忠告することが難しくなっている。第一幕の宴でタイモンが音楽を奏で踊った婦人たちに宝石を与えようとするのを見て、フレーヴィアスは「彼の気分逆天らつてはならないが、そうでなければ言わなければならない」(1.2.161-62)と言っている。

もちろん、フレーヴィアスの慎重さにも彼なりの言い分がある。二幕二場の冒頭では、

彼は積みもり積みもった請求書を手にしながら、「身に染みて感じなければ、聞こうともならないだろう」(2.2.7)と嘆き、忠告すべき時をうかがっている。ところが、皮肉なことに身に染みて感じるような時には、すでにどれだけ忠告をしてもとりかえしのつかない事態となってしまう。フレーヴィアスの言い分が妥当かどうか疑わしいのは、彼がタイモンに対し涙を流しながら何度も忠告をしたと主張する内容が、舞台上では再現されていないことも理由の一つとなっている。観客や読者にとって、フレーヴィアス自身の言葉から伝えられることが追従者たちの言葉とは違い、真実であるという保証はないのである。

キケローは友情論の中で理想的な助言をする真の友人と追従者の違いを指摘したが、プルタルコスにはキケローの主張した追従者の問題をさらに深く掘り下げている。プルタルコスによれば、追従者は真実の敵であり、「人をだまし、その人の美德や悪徳をわからなくさせ、結果として美德は完全なものにならず、悪徳は矯正しがたいものとなる」(Plutarch 266-67)。『アテネのタイモン』においても、タイモンの慈愛という美德は追従者によって放蕩や散財といった悪徳に変えられ、タイモンがそれに気づくことは困難になっている。フレーヴィアスやアペマンタスが嘆く追従者の存在は、彼らのタイモンへの真の忠告を遠ざけてしまう。プルタルコスはこうした事態を避けるために、友人を試し自分を騙そうとする追従者を前もって見抜くようにしなければならないと主張する (Plutarch 268-69)。

タイモンの過ちは、友人関係を形成する時だけでなく、友人関係を試す時にも見られる。友人であると期待する者たちが自分を助けてくれると信じて疑わないタイモンは、宴に参加している者たちに向かって、「友人たちよ、神々のお導きにより私があなたたちに助けを願うときが必ず来る、そうでなければどうしてあなたたちが友人であろうか」(1.2.87-89)と言う。しかし、これは明らかに矛盾している。これまで助ける側であったタイモンが、助けられる側になって初めて友人であるというのであれば、まだ助けられる側に回ったことのないタイモンが彼らを「友人たち」と呼びかけることができないはずだからである。

タイモンはプルタルコスが考えるように「前もって」友人を試そうとするのではなく、実際に危機に瀕してから試そうとする。タイモンはフレーヴィアスの涙ながらの忠告を遮って、「説教はもうたくさんだ…ある意味でこれは名誉ある窮乏だ、私は神の祝福とさえ思う。これによって友人を試すことができるのだから」(2.2.172, 181-83)と言っている。追従を受け入れ、忠告に耳を閉ざすタイモンは、すでに友人関係が作られていたと思いつめていた。それにも関わらず、今さらになって試そうというのは失敗が目に見えている。

もちろん、友人を疑い試そうとするのは、特に今日の読者や観客であれば、倫理的に問

題があるかもしれない。一方で、友人を信じて疑わないタイモンの態度は、彼の恵み深さと同様に美德としても考えられる。しかし、フレーヴィアスが案じているように、タイモンはあまりに人を疑わず、上辺の言葉に騙されてしまう。フレーヴィアスに言わせれば、「友人を疑うことは恵み深さの敵であり、ご自身の気前がいいから、他人もそうだと思う」(2.2.233-34)のであり、フレーヴィアスとともに読者や観客もまた、タイモンが追従者たちから拒絶されるとわかっていながら、次の場面を眺めることになるのである。

3. 追従者に対する憎悪と忠告者の拒絶

忠告をしても無視されるフレーヴィアスやアペマンタスの主張を考慮するならば、タイモンの愚かさばかりが強調される。しかし、追従者から逃れることはたとえタイモンがもっと賢明であったとしても容易なことではない。アテネを離れ独りで暮らすタイモンは、訪ねてきたアペマンタスに「おまえが巻布にくるまれた赤子のときから短い世が与える楽しい階級を次々と上っていけば」(4.3.251-52)、自分と同じように追従に取り囲まれ忠告などには耳を貸さなかっただろうと言っている。追従者は「無数の葉が柏の大木に張りつく」(262-63)ように、タイモンに寄り添って離れようとしないのであり、彼らは有力者にどうしてもついてまわる障害となっているのである⁽⁴⁾。

追従者の罪はタイモンを正しい忠告から背けることだけではない。タイモンが思い込んでいるように追従者たちが真の友人であるならば、実際に助けられるかは別としても、少なくとも助けようとするべきである。しかし、彼らはタイモンから利益を得るために機嫌をとっているだけなので、タイモンが破産したときに見捨ててしまう。彼らの忘恩はタイモンの恵み深さと対照的である。ルーカラスがタイモンの頼みを断ったことを聞き、ルーシアスは「まったくもって恥ずかしい。あの高潔な人を拒絶した？それでは名誉のかけらもないことになる」(3.2.16-19)と、タイモンの高潔さを強調する一方で忘恩の罪を自覚しているが、実際自分のところへタイモンの使いが来ると態度を豹変させている。

このような二面性は『アテネのタイモン』における詩人や画家にも表れている。彼らに加え、宝石商、商人たちは初期近代イングランドのパトロン制度を反映したように、タイモンという有力者の庇護を受け、代わりにパトロンを賛美するような詩や肖像画を描き、商品を取引する。詩人や画家がその技巧でパトロンに賛美することで奉仕する姿は、悪い意味で取れば追従を言っているにすぎないということもできる。また、一幕一場で哲学者

アペマンタスは詩人を嘘つきであると断定するが、このような指摘はサー・フィリップ・シドニーの『詩の擁護』で取り扱われ、反駁されている (Sidney 102-03)。

興味深いことに、シドニーは『アテネのタイモン』にも登場する、哲学者と詩人、画家と詩人を比較して論じている。シドニーによれば、あらゆる教養の最終目標は人に美德を教え込むことであるが、厳しいことばかり言う哲学者を嫌う者であっても、詩人は楽しませつつ教えることで聞く者の心を捉えて離さないという (Sidney 95)。また、シドニーは詩人を画家にたとえて、「哲学者がこのようにするべきだと言うどんなことに対しても、そういうことをしたと彼が想定する誰かによるその行為の完全な絵を描き、このようにして一般的概念と特定の実例とを結合するのである」(Sidney 90)と述べている。

このように詩人が特定の人物を寓意的なものと結びつけて描き出すことは、『アテネのタイモン』の詩人が主張する内容と一致する。詩人は彼が描き出す対象がタイモンであることを示唆しながら、次のように自分の詩について説明する。

My free drift
Halts not particularly, but moves itself
In a wide sea of wax; no levelled malice
Infects one comma in the course I hold,
But flies an eagle flight, bold and forth on,
Leaving no tract behind. (1.1.46-51)

詩人はこの場面で献上する詩について、タイモンの栄華の儚さと追従者を描き出そうとしているが、それはタイモンを「個別に (particularly)」非難するものではないと主張する。タイモンに自身の過ちを気づかせるような道徳的寓意を教え込みつつ、それを芸術による奉仕として昇華し、たんなる個人的な非難に陥ることを回避しようというのである。これはキケローが論じたような、苛烈にならないような忠告に通じるものがある。こうした詩人の主張に対し、最後に画家は次のように言うことで会話を締めくくる。

'Tis common:
A thousand moral paintings I can show
That shall demonstrate these quick blows of Fortune's
More pregnantly than words. (1.1.91-94)

画家が“common”と言っているのは、タイモンの栄華の儚さと彼につきまとう追従者の存在というのが、タイモン自身のことにとどまらず、詩が描き出すべき道徳的寓意であると同

意しているともとれるし、それは画家が描き出す題材としても詩以上にありふれたものであると言っているようにもとれる。いずれにせよ、詩が個人と寓意を二面的に描写することを絵画と並べて論じている点で、『アテネのタイモン』における詩人と画家はシドニーの『詩の擁護』での議論の一種のパロディとなっていて、その二面性はパトロンに追従的に奉仕しつつ、裏ではただ食べ物にしようとする性質となって表れている。

一方で、詩人や画家の描き出そうとするタイモン像には誤りはなく、彼らの作品やタイモンの宴で披露される婦人たちの踊りや音楽も、タイモンの心を捉えて離さない魅力があるという意味では、一概に否定されるものでもない。『アテネのタイモン』は女性の登場人物が極めて少ないという点で知られているが、宴に現れる婦人たちの存在と物語全体を通して点在するタイモンの女性性への言及は重要である。なぜなら、彼が歓迎する装飾的な言葉や芸術的な才芸は、しばしば女性的な誘惑と結び付けられて論じられているからである。たとえば、理想の宮廷人論を論じたバルダッサール・カスティリオーネの『廷臣論』では、主君の心を捉えて離さない臣下の言葉や才芸は女性に属するものであり、また聞くものを女性的にするという批判もあるが、それは主君に美德を教え込もうとする目的によって正当化されると論じられている (Castiglione 284)。

忠告を無視し追従を受け入れるタイモンがより悪いのか、それとも有力者を食べ物にする追従者がより悪いのか、本作品中では明らかにされない。いずれにせよ、タイモンは破産したからではなく、追従者にうんざりしたという名目でアテネの街を出ていくことになる。アテネを離れる前に最後に開いた宴で、「口先だけの友人」(3.7.88)の「追従」(90)を呪い、次のように言う。

Live loathed and long,
Most smiling, smooth, detested parasites,
Courteous destroyers, affable wolves, meek bears –
You fools of fortune, trencher-friends, time's flies,
Cap-and-knee slaves, vapours and minute-jacks!
Of man and beast the infinite malady
Crust you quite o'er! (92-8)

追従者の二面性は、執拗に繰り返される形容矛盾によって、タイモンに激しく非難されている。人間でありながら、けだもののような残忍さを持ったアテネの人々を呪い尽くすために、タイモンは「人間とけだものにとりつく病氣 (Of man and beast the infinite malady)」に犯されてしまえ、と浴びせかける。

タイモンにとって、もはや「あらゆる人間の性質は憎まれる」(3.7.103-04)べきものであり、人間すべてが追従者である。その一方で、森に行けば「最も無情なけだものでも、人間よりは情け深い」(4.1.36-37)とタイモンは期待する。森の中でアペマンタスと話しながら、タイモンは追従者について皮肉を込めて次のように言っている。

APEMANTUS What things in the world canst thou nearest
compare to thy flatterers?

TIMON Women nearest; but men – men are the things
themselves. (4.3.317-20)

タイモンが追従者としてまず女性を挙げ、ついで男性をそれ以上の追従者として挙げているのは、カスティリオーネのように女性性を一方的な非難的から解放するとともに、墮落した人間すべてを痛烈に非難するものとなっている。女性が追従者に最も近く、男性は追従者そのものだというのがあれば、タイモンにとってつき合うべき人間はいなくなる。結果として、アテネは「けだものの森 (a forest of beasts)」(4.3.345)となり、「安全策は離れていることであり、防御策はそこにいないことだけ (all thy safety were remotion and thy defence absence)」(4.3.340-41)しかなくなってしまう。

4. タイモンの言葉

タイモンは破産をきっかけに追従者のほびこるアテネの街から離れて一人森に住むようになるが、皮肉なことに金貨を掘り当て再び一財産を手に入れてしまう。素朴に生きるために草の根を得ようとしたのにもかかわらず掘り当ててしまった金貨に対し、タイモンは人を墮落させるものであるとして罵る。しかし、太鼓の音を聞いて人が来たと知ると、タイモンは金貨を埋め、いくらか手元に残しておく。もちろん、タイモンは社会的な人間として他人と付き合う気はないから、その金で何かを得たり、まして追従を買おうとしたりする気などない。しかし、純粋に言葉だけで人間関係を構築できないタイモンは、依然として金銭の贈与に頼ることになるのである。

アテネにいた時とは異なり、タイモンは無償で金を与えようとするわけでもなければ、商品の代金よりも過剰に与えるわけでもない。金を渡す代わりにタイモンは、アテネへの進軍の際に通りがかったアルシバイアディーズにはアテネを存分に破壊するよう指示し、

フライニアとティマンドラには売春を奨励するのである。フライニアとティマンドラは「もっとお金をくれて、もっと助言をしてよ (More counsel with more money, bounteous Timon!)」(4.3.166)と言うが、上辺だけの追従を買う代わりにタイモンは、彼女たちの求めに応じるように、金で実際の奉仕を促すようになる。

追従にせよ、忠告にせよ、これまでは言葉を受ける側であったタイモンは、ここで初めて積極的に言葉で他者に働きかけるようになっている。しかし、狂気に満ちたタイモンの言葉は、それが意味する奉仕を促す、純粋な命令ではない。むしろ、タイモンの言葉は聞く者の心をとらえ、もっと別な方向へと行動を促している。たとえば、アルシバイアディーズは、「くれる金は受けとるが、いまの忠告すべてを受け取りはせぬぞ (I'll take the gold thou givest me, / Not all thy counsel)」(4.3.129-30)と答える。実際、彼はタイモンのアテネへの呪いに後押しされるように進軍するが、最終的にはアテネを破壊しないで終わる。続いてやってくるアペマンタスに対しても同様であり、タイモンがアペマンタスを追い返そうとするほど、アペマンタスはタイモンとの会話を続けようとする。

タイモンの言葉に変化が見られる一方で、他者の言葉に対するタイモンの態度にも変化が見られるとともに、変わらない部分も見られる。アテネにいた時には、タイモンは厳しい忠告に耳を傾けず、甘い追従を受け入れていた。これに対し、森で生活するタイモンは、訪れた人々の追従をものは受け入れなくなっている一方で、これまでどおり、忠告も受け入れようとしない。追従者を避けるべき存在であると悟ることができたと同時に、すべての人々を追従者であると決めつけて排除しようとしているからである。アルシバイアディーズが「友人として、してあげられることは何か」(4.3.71)と尋ねても、タイモンは取り合わない。代わりに、「自分をほめた」(4.3.172)ことを非難するのみである。

追従者とは対照的な、痛烈な忠告をしていたアペマンタスもまた、タイモンによって追従者として排除される対象となる。アペマンタスはそれまで自分が忠告していたようにタイモンが追従者を嫌うようになっているため、「前よりあんたが好きになった (I love thee better now than e'er I did)」(4.3.232)と言う。だが、以前とは違い自分に好意的な言葉より批判的な言葉を求めるタイモンからすれば、これはかえって追従と受け止められるのである。そして、これまで通りアペマンタスの忠告をタイモンが受け入れることもない。トム・マクフォールはタイモンとアペマンタスの関係を「反・友情」(anti-friendship, or negative friendship)であると指摘し、アペマンタスが「そんなにみじめなら、お前は死を望むべきだな (Thou shouldst desire to die, being miserable)」(4.3.247)と言うのをタイモンが聞き入れ、

最後には死を選ぶと論じている (MacFaul 148)。しかし、これは直後にタイモンが「俺以上にじじめなやつ」の忠告で死ぬつもりはない (Not by his breath that is more miserable) (4.3.248)と答えているように少なくとも表面上は拒否している。タイモンとアペマンタスの関係が「反・友情」であるとすれば、それは望ましくない忠告を受け入れあうことではなく、むしろ互いに忠告をしながら互いに無視するという意味においてなのである。

結局厳しい言葉と冷笑的な態度でしかタイモンと会話することができないアペマンタスはタイモンと一つの行を共有して、「けだもの!」、「奴隷!」、「ヒキガエル!」、「悪党、悪党、悪党!」(4.3.370)と互いに罵り合うことでのみ調和する。あるいは、森に住むタイモンの呪いの激しさは、アペマンタスの苛烈な忠告を身につけたものとも言える。タイモンと一応の調和を見せるアペマンタスは、他の訪問者とは異なる特別な存在であり、実際、森に住むタイモンを訪ねた者の中で唯一タイモンが金を与えようとしない相手である。しかし、アルシバイアディーズの時と同様、共に行動するには至らない。それだけでなく、アペマンタスもまた、一人にしてくれというタイモンの言葉を裏返すように、「おれはあんたが金をもっていると言いつらしてこよう。いまにおおぜい押しかけてくるぞ」(4.3.388-89)と言って去っていくのである。

タイモンの言葉に最も極端に左右されるのは、アペマンタスの後にやってくる山賊たちである。彼らはタイモンが一度すべての財産を失ったと知りながら、また大金を所有しているという噂を聞いてタイモンから金を脅し取ろうというつもりである。しかし、彼らは山賊ではあるが、タイモンをいきなり襲ったりはしない。むしろ、タイモンから言わせれば、アテネの不道德な者たちは等しく泥棒なのであり、「しかつめらしい身なりで仕事をやらかしたりしない」(4.3.421-22)だけでも、山賊たちのほうがましなのである。

山賊たちはまず自分たちがいかに食うのに困っているかという事情を話すことから始めると、タイモンは自然の中で質素に生きていくことを説きながら、悪人のほびこるアテネで存分に悪事を働くように勧め、見返りとして金を与えようとする。すると、山賊たちはタイモンから金を奪おうとする気持ちをそがれ、泥棒家業から足を洗おうと考えるようになる。これは『ペリクリーズ』でマリナーの説教により売春宿に通う男たちが改悛して帰っていくのと同じような笑いを誘う場面である。マリナーの言葉は直接的に相手に響くが、タイモンの辛辣な言葉はアイロニカルに相手の心をやわらげ、聞くものにかえて平和的な選択を導いている。これは詩人の詩がタイモンの耳に甘く響く言葉を並べ立てておきながら、実際は辛辣な内容であったのと対照的である。

山賊が去った後にやってくるフレーヴィアスは、最もタイモンの心を動かすことになるが、彼がやってくるころにはタイモンはフレーヴィアスが誰なのかもわからなくなってしまっている。フレーヴィアスは自分がタイモンのもとで働いていた執事であると主張して涙を流すが、それを見たタイモンは、「お前が女であり、心無い男ではないと言うのなら、お前を愛そう (I love thee / Because thou art a woman and disclaim'st / Finty mankind)」(4.3.477-78)と言う。これに対し、フレーヴィアスは「私をお認めください、ご主人さま、そして、私の悲しみをお汲み取りになり、この貧しい財産が続く限り私を執事としてお雇いください (I beg of you to know me, good my lord, / T'accept my grief and whilst poor wealth lasts / To entertain me as your steward still)」(4.3.482-84)と申し出る。

ディヴィッド・シャルクウィクはタイモンの過ちを忠実なフレーヴィアスの助言を理解できなかったことであると捉え、それが理由でタイモンは自身の人間性を取り戻せないでいると指摘する。シャルクウィクによれば、ここでもフレーヴィアスが主従関係における「相互提供 (mutual render)」さえも求めず主人への無私無償の愛情を注ごうとするにもかかわらず、タイモンは受け入れることができないという (Schalkwyk 160)。シャルクウィクはシェイクスピアにおける主従関係を論じているが、従う側の者たちに擁護的である。だが、相互提供を拒絶していたのは、もともとタイモンのほうであり、フレーヴィアスの誠実さはタイモンの神聖なまでの恵み深さと同質のものである⁵⁾。

フレーヴィアスの申し出はタイモンの荒々しい気性をやわらげ、フレーヴィアスという一人の正直な執事がいたことを思い出させる。涙を流しながら訴えるフレーヴィアスの言葉は、それまでのタイモンへの忠告の言葉とは全く質の異なる、心をとらえるような力を持っているのである。同時に、フレーヴィアスに涙を流させるタイモンの言葉もまた同じような力を持っていると言える。涙を流して訴え、涙を誘うタイモンやフレーヴィアスのレトリックは、タイモンが言うようにただ涙を流すゆえに女性的であるというのではなく、カスティリオーネが女性的であると論じたように効果的に魅惑する性質を持ち合わせている。その意味では、アペマンタスの忠告のような苛烈さをタイモンが身につけたように、フレーヴィアスのような相手の感情をむやみに刺激することなく、むしろ気持ちを和らげるような表現を、タイモンは獲得していると言える。

このようにフレーヴィアスが誠実に訴え、タイモンがそれに共感しているにもかかわらず、タイモンは最終的にフレーヴィアスの言葉を拒絶し、執事として傍に置いておこうとはしない。そして、あとからやってくる詩人と画家をからかったあと、アルンパイアディ

一ズの進軍に際しタイモンを呼び戻そうとした元老院議員たちの説得も軽くあしらってしまう。タイモンは追従者を憎み、呪いの言葉によって、かえって聞く者の心を穏やかにするが、一方で助言者もまた最後まで拒絶し続けるのである。結局のところ、タイモン自身は依然として「助言し合う関係」を構築できないことで、人間社会から離れ、一人死んでいくことになる。しかし、身を以て悲劇を演じたタイモンの生涯は、タイモンと同じ財産管理と人間関係に悩みを抱えるであろう者の心を動かし、もっとも効果的な助言として提示される。

タイモンの墓碑銘はタイモン最後の言葉であり、真の詩人のように言葉で心をつかみ助言を与えることのできる、タイモン唯一の書き残された詩である。墓碑銘の冒頭にある「我、タイモン、ここに眠る」(5.5.70)という言葉は、フォリオ版に合わせて載せられた「我が名を尋ねることなかれ」(70n.)という内容とは一転して、他者と交わることを意識した言葉である。アルシバイアディーズがこのタイモンの墓碑銘を評して「豊かな想像力に教えられ、罪を赦し、いまは海神大ネプチューンを永久に泣かしめる (yet rich conceit / Taught thee to make vast Neptune weep for aye)」(5.5.75-76) と言うとき、タイモンは自身に献上された詩と同様、自らを主人公とする詩を自分の人生の中に刻みながら、シェイクスピアの『アテネのタイモン』という作品となって観客の前に提示されることになる。

5. 結び

タイモンは耳に聞こえの良い追従を求める一方で、忠告には耳を貸そうとしない。これはタイモンの過ちであるが、『アテネのタイモン』という作品が描き出すのは、愚かな主人公タイモンといった単純なものではなく、彼に追従を言う者たちの悪徳や、忠告する者たちの至らなさを、タイモンにも他の登場人物にも偏ることなく倫理的問題として問いかけられるような悲劇である。タイモンはそれを悲劇的風刺劇の主人公として経験し、自分のものとする。アペマンタスはどうしても他者と交わろうとしないタイモンのことを「人間の中庸を知らない (The middle of humanity thou never knewst)」(4.3.300)と指摘するが、タイモンはむしろ追従に陥らずに聞く者の耳を傾けるような忠告をできるようになっているのであり、その意味では彼は『アテネのタイモン』の主人公にして、その悲劇を語り聞く者の涙を誘い天上へと導く真の詩人になり得ているのである。

注

- (1) 本論における引用は、すべてアーデン版のアンソニー・B・ドーソンとグレットシャン・E・ミントンの編集に拠る。また、日本語引用は小田島雄志訳を参考にしているが、議論に合わせて適宜訳をつけている。
- (2) 主従関係における助言に注目したものとして、アンドリュー・ハドフィールドの研究が挙げられる。ハドフィールドはジェームズ朝の政治状況と比較し、追従によって墮落した主従関係と支配者層に乱用される法が『アテネのタイモン』において描かれていると論じている (Hadfield 214)。
- (3) デイヴィッド・バビングトンとデイヴィッド・L・スミスは、タイモンの散財をジェームズ一世の財政難と関連づけて論じている。また、コッペリア・カーンはタイモンの恵み深さをエリザベス一世とジェームズ一世のパトロン制度と比較して論じている。
- (4) ハドフィールドは追従者についてニコロ・マキヤヴェリの *The Prince* (1532) で取り上げられているような問題が『アテネのタイモン』で反映されているとしている (Hadfield 214)。追従者の問題を扱ったルネサンス期の資料としては、主にデジデリウス・エラスムスの *Education of a Christian Prince* (1516)、バルダッサーレ・カステリオーネの *The Book of Courtier* (1528)、サー・トマス・エリオットの *The Book named the Governor* (1531) などがある。
- (5) ジャックソンはそれまで人間の営みとしては不可能であり、タイモンが神との間で唯一求めているような贈与という行為が、ここでフレーヴィアスがタイモンと同じ不可能性を求めることで、初めて神秘的に不可能性を可能なものに変換させていると主張する (Jackson 64)。

参考文献

- Anonymous. *Timon*. Eds. J.C. Bulman and J. M. Nosworthy. Oxford: Oxford UP. 1980.
- Bevington, David and David L. Smith. "James I and Timon of Athens." *Comparative Drama* 33 (1999), 56-87.
- Buchanan, George. *A Dialogue on the Law of Kingship among the Scots: A Critical Edition and Translation of George Buchanan's De Jure Regni apud Scotos Dialogus*. Eds and Trans. Roger A. Mason and Martin S. Smith. Aldershot: Ashgate, 2003.
- Burke, Kenneth. *Language as Symbolic Action: Essays on Life, Literature and Method*. Berkeley and Los Angeles: U of California P, 1966.
- Castiglione, Baldesar [Baldassare]. *The Book of the Courtier*. Trans. George Bull. Harmondsworth: Penguin Books, 1967.
- Elyot, Sir Thomas. *The Boke named the Governor*. London, 1531.
- Erasmus, Desiderius. *The Education of a Christian Prince*. Trans. Neil. M. Cheshire and Michael. J. Heath. Ed. Lisa Jardine. New York: Cambridge UP, 1997.
- Greene, Judy. "'You must eat men.'" *The Sodomitic Economy of Renaissance Patronage.* *GLQ: A Journal of Lesbian and Gay Studies* 1 (1994), 163-97.
- Hadfield, Andrew. *Shakespeare and Renaissance Politics*. London: Thomson Learning, 2004.
- Jackson, Ken. "'One Wish" or the Possibility of the Impossible: Derrida, the gift and God in *Timon of Athens*." *Shakespeare Quarterly* 52 (2001), 34-66.
- James I. *The True Law of Free Monarchies and Basilikon Doron*. Eds. D. Fischlin and M. Fortier. Toronto: CRRS Publications, 1996.
- Kahn, Coppélia. "'Magic of bounty": *Timon of Athens*, Jacobian Patronage, and Maternal Power." *Shakespeare Quarterly* 38 (1987), 4-57.
- Klein, Melanie. *Envy and Gratitude and Other Works*. London: Vintage, 1997.
- Lucian. *Certain Select dialogues of Lucian*. trans. F. Hickes. Oxford: W. Turner, 1634.
- MacPaul, Tom. *Male Friendship in Shakespeare and His Contemporaries*. Cambridge: Cambridge UP, 2007.
- Machiavelli, Niccolò. *The Prince*. Trans. George Bull. London: Penguin Books, 2003.
- Piazza, Antonella. "'What dost thou think 'tis worth?'" *Timon of Athens* and Politics as a Nonreligious

- Religion.” *Shakespeare and European Politics*. Ed. Dick Delabastita. Newark: U of Delaware P, 2008, 246-54.
- Plutarch. *Lives of the Noble Grecians and Romans*. Trans. Thomas North. Cambridge: Cambridge UP, 1676.
- , *Moralia*. Vol.1. Trans. Frank Cole Babbitt. London: Harvard UP, 1927.
- Schalkwyk, David. *Shakespeare, Love and Service*. Cambridge: Cambridge UP, 2008.
- Shakespeare, William, and Thomas Middleton *Timon of Athens*. Eds. Anthony B. Dawson and Gretchen E. Minton. London: Thomson Learning, 2008.
- Shakespeare, William, and George Wilkins. *Pericles*. Ed. Suzanne Gossett. London: Thomson Learning, 2004.
- Shannon, Laurie. *Sovereign Amity: Figures of Friendship in Shakespeare's sonnets and Plays*. Chicago: U of Chicago P, 2002.
- Sidney, Sir Philip. *An Apology for Poetry*. Ed. Geoffrey Shepherd. 3rd ed. Rev. R. W. Maslen. Manchester: Manchester UP, 2002.
- キケロー『友情について』中務哲郎訳、(岩波書店、2013)